北里大学高等教育開発センターニュース

Center for Development of Higher Education, Kitasato University NEWS

Vol.8

Contents

1 —— 巻頭言

2 —— 第5回北里大学高等教育開発センター講演会報告

3 —— 第5回北里大学高等教育開発センター講演会
大学教員の能力開発 —教育と研究と学問的誠実性—
に参加して

4 —— e-Learning講習会報告
第1回Moodle講習会／クリッカー講習会

5 —— FDへの取り組み（第８回）
FDのための必読書 －８

6 —— INFORMATION

巻　頭　言

高等教育開発センターに望むこと

薬学部教授　高等教育センター運営委員　石井邦雄

平成19年の4月に高等教育開発センターが開設されて以来，早いもので，この秋で2年半が経過したことになる。この間，高等教育開発センターは各種の講演会，講習会，FD研修会等の企画・実施を通じて活発な活動を続け，着実に実績を積み重ねてきた。運営委員として微力ながらその活動に参画させて頂く機会を得た者として，センター員の努力と実行力には，真に頭が下がる思いである。これからも，大いに活動の幅を広げ，その深さを増して，本学の教育に対する指針を示し続けて頂きたい。

さて，「大学，冬の時代」と言われて久しい。少子化により，平成4年度以降，18歳人口(→高校卒業者数)は減少の一途をたどっているが，この時期，大学進学率は上昇を続けてきたため，これまでのところ，大学入学者数は約60万人をやや下回る水準で微増を維持してきた。しかし，今後も18歳人口の減少が続くことは確実であり，一方，ユニバーサル化の時代を迎えて，大学進学率には大きな伸びを期待することができない。だとすれば，それらの積としての受験生数は，早晩，減少に転じるに違いない。それに加えて，近年の大学入学定員の増加が，「冬」の寒冷化にさらに拍車をかけている。既に多くの大学では，現実に受験生の奪い合いや受験生の全員合格という由々しき事態が起こっており，あらゆる手を尽くしても十分な入学者を確保できない大学は赤字へと転落する。昨年度には，4年制私立大学の47%が定員割れを起こし，また39%が赤字に陥っている。幸い本学の現状はそれほど悪くはないにしても，有名大学という恵まれた立場に甘んじて安穏としている場合ではないことは明らかであろう。

受験生数の減少と大学進学率の上昇は，学生の質という点にも重大な影響を及ぼしている。すなわち，学力および意欲の低下と興味・指向の多様化である。大学進学率が低かった頃は，一部のやる気と学力のある高校生が大学を目指していたと考えられるが，大学進学率が高まった今日では，やる気も学力もない高校生までが大学を目指し，入学を許可されてしまう。したがって，偏差値が大きく変わっていないから，学力は低下していないと考えるのは誤りである。母集団が違うので，偏差値という指標でかつての学生と単純に学力の比較をすることはできない。むしろ，裾野が下へ広がった分，以前と同程度の学力があると推定するためには，偏差値は上昇していなければならないはずである。恐らく，平均学力の低下は，意欲の低下や興味・指向の多様化と無縁ではないであろう。

大学内外の状況はかくも厳しい。少なくとも我々は，これらの問題を正しく認識し，本学の特色を最大限に活かした対策を効果的に実行することで，今後も優秀な学生を確保していかなければならない。それでは，本学の特色とは一体何であろうか。本学は「生命科学の総合大学」であるといわれる。確かにその通りである。しかし，それは本学の学部等の構成に基づく，単なる表層的なキャッチフレーズに過ぎないのではないだろうか。本学が真に「生命科学の総合大学」として機能し，健康に関連する諸科学のフロンティアに位置し続けるためには，本学の教育をどうしたら良いのであろうか。高等教育開発センターには，実は本学の将来を切り開いて行くうえで最も根源的なこの問いかけに，是非とも答えて頂きたいのである。そして具体的な計画を立て，それを全学に提案し，実行に移していって頂きたいと思っている。本学の教育を一段高い視点から俯瞰的に眺めることができるのは，高等教育開発センターを措いて他にはないのである。奮闘を祈らずにはいられない。

第5回北里大学高等教育開発センター講演会報告

去る7月31日(金)，羽田貴史氏(東北大学教授・東北大学高等教育開発推進センター高等教育開発部長)をお迎えし，相模原校舎L3号館において第5回高等教育開発センター講演会が行われました。参加者は学内から76名(テレビ会議システムでの聴講者を含む)，さらに学外から14名と多数にのぼりました。講演は，鈴木牧彦センター長の挨拶と小島佐恵子センター員による講師紹介に引き続き，およそ1時間半にわたって行われ，その後，活発な質疑応答がなされました。

今回の講演会の演題は,「大学教員の能力開発 ー教育と研究と学問的誠実性ー」というものでした。今までともすれば「授業改善」としてのみとらえられたきたFD活動を，研究・教育・管理運営など多岐にわたる教員の能力開発として捉え直す必要性があるという内容で，「大学研究者による研究上の不正行為」といった，従来のFD活動の講演などでは取り上げられることのなかった話題にまで及びました。以下講演の概要を簡単に紹介しますが，当日聴講できなかった方，あるいは今一度聞いてみたい方のために，高等教育開発センターのホームページに，講演の録画と配布されたレジメのPDFが用意されています。＜高等教育開発センターHPトップ→刊行物／イベント(http://www.kitasato-u.ac.jp/cdhe/event/index.html)＞(学内のみ)

講演の概要

今，大学のありかたが大きく変わりつつある中，大学の教員の仕事も変わりつつあり，今まで経験したことのないことにもチャレンジしなければならなくなっている。そのような状況において一人一人の教員の力をつけることが本来的なFD活動だと思われる。しかしながら現在日本では，FDというと教員個人や集団の教育改善とする理解が広まってしまっている。多くの大学で講演会・研修会の参加・授業評価・公開授業などが(狭義の)FD活動として行われているが，その成果が今問われている。これらの活動の成果については，立場によって評価が異なっている。学長レベルではFD活動は効果があると評価しているが，多くの教員はこれらの従来型のFD活動は有力な教育活動の方策とは思っておらず，むしろ負担の軽減・講義の準備時間の確保・カリキュラムの体系化，などが重要と思っている。本来，FDというのはこれらを含むトータルな教育活動に関するものを含んでいるのであって，教育改善を教員個人の努力のみに限定しない取り組みが必要になっている。

教育活動の成果を測定する指標としては，学生による授業評価で十分であり，東北大の場合には，大きく分けて，学生の学習態度・教員の教育活動・学生の満足度や理解度，について調べている。このような授業評価からは，教員個人の授業がどうなっているかということだけでなく，カリキュラム設計など，その大学の教育の状況や問題点を知ることができ，組織的な改革にも使うことができる。

大学教員に求められる能力については，揺らぎつつある。特に教育の能力と研究の能力の関係については議論がある。欧米の研究結果では，教育と研究は相互にあまり関係がない状態(loosely couple)であるというのが共通理解になっている。しかしながらそれ故に，両者を大学においてどう結びつけて行くかということが大事なのであって，「教育だけの大学」というものがあって良いということではない。

大学の教員には，助手・助教から定年まで，いくつかのキャリアステージがあり，教育・研究を含んだ教員の能力開発も，それぞれのキャリアステージによって必要とされる内容が異なっている。例えば教育能力に関しては，教員になって数年以内では，指導助言を求める人が多く，教員経験が長くなるとサバティカルを求めるようになる。研究能力に関しては，欧米では研究能力の年齢的な限界は意識されていないが，日本では40代ぐらいが限界ととらえられていることが多い。これは実際には能力よりも制度的な違いによるものと思われる(日本ではキャリアステージが進むにつれ研究管理の仕事が増える)。FD活動は，このような制度的な要因も視野に入れてキャリアステージに応じた内容にしなければならない。

学生が教員に求める事に，大人としての思慮深さ，学問的誠実さ，といったものもあり，実際，大学教員は社会的に「信頼できる」存在と思われている。しかしながら，この信頼を裏切るような行為，すなわちミスコンダクトが教員の中に広がっていて，大きな問題になっている。具体的には，研究成果のねつ造，偽造，剽窃といった行為である。さらに最近では，これらの範疇に収まらないミスコンダクトが問題になってきている。特に大きな問題の一つがauthorship，著作権である。50年ほど前には論文1つの著者の人数は約1.8人だったのが，10年前にはその2倍以上の3.8人になっている。極端な例として，著者が970名にものぼる論文まで登場している。この背景には，儀礼的に，あるいはギフトとして，実際には研究に参加していない人を著者に加えていることもある。研究者同士が相互にこのようなことをすることで，見かけ上の業績やインパクトファクターを増やすことにつながっている。このほかにも，特許のからんだ研究における秘匿主義の問題や，学生のあげた研究成果の管理権が学生にあるのか主任教授にあるのかといった種々の問題がある。これらについては厳しい規定を作るよりも，教員たちの中に学問的誠実性の文化を作るしかないという事を強調したい。

第5回北里大学高等教育開発センター講演会
大学教員の能力開発 ―教育と研究と学問的誠実性― に参加して

一般教育部基礎教育センター　外国語単位　黒澤麻美

去る7月31日，相模原キャンパスにおいて，東北大学高等教育開発推進センターの羽田貴史先生による，上記の講演会に参加した。事前のポスター等から予想された通り，非常に盛りだくさんな内容で，もっと時間があればよかったと感じる有益な講演会であった。

卑近な話から入ると，特に文系の大学教員の間では，世間一般の「大学の先生」のイメージは時代遅れで現実と乖離しているという話題がよく出る。一，二昔前まで，大学教員は自分の好きな研究に勤しみ，講義やゼミの場では，学生の理解の程度にあまり拘泥せず，ひたすらに持てる知識を供給し，俗世間から多少浮いていようが，毎日接している若者の生態に無知であろうが，大して問題もなかったように思われる。時代は変わった。

講演の一番の要は「FD を ED（Educational development）として発展させる」ということであった。現在までの FD は授業評価という形で教員と学生の間に双方向性を持たせ，授業の改善に努力し，講演会などで教員に教授法などを学習させるという活動が中心であったが，教員の研究，管理運営活動，社会活動まで含めた広い枠組みでの取り組みが望ましく，また要求されているというのである。これを聞いて，初めは話が大きくなり，実行が難しくなるのではないかと思ったのだが，大学教員を全体的な文脈の中に置いて考えていて，単なる「教え方」の工夫といった狭い範囲に焦点を当てていないので，本当の意味で教員の支援になってくれる捉え方であろうという期待が持てた。大学教員は専門の研究に関することを除けば，他の職業の就業者に比べて，上司や前任者から職業上の手ほどきを受ける機会が少ないと感じる。したがって，大学が多面的な支援を組織的に与えてくれるような体制は，教員にとって非常に心強いであろう。結果的には各種の仕事の効率も上がり，その利益が授業とその他の活動を通じて学生にも還元できるであろうと思われる。

講演の話題の中で，私個人がこれまであまり考えていなかった概念が「キャリアステージ」であった。教壇に立って年月の浅い教員が授業運営に不安を持つこと，ステージごとに教員の FD ニーズが異なることは，言われてみれば当然と思われるが，現在までのところ，本学の FD 活動，そしておそらく日本の大学の大半での FD 活動は，この面を十分に考慮に入れてきていないと感じられた。今後の研究発展，特に実践に直結する成果を期待したい。

紹介していただいた中で，最も納得のいく資料は「教員の FD ニーズ」というものであった。教員は FD のための講演会，授業・教員評価に参加してはいるものの，これらの必要性と有効性の評価は低い。授業参観，指導助言，研修参加などは有効と考えられるのに，参加のチャンスそのものが少ないということだ。しかし，教員が最も求めているのはサバティカルや授業の軽減であり，これらが有効な手段であると考えているということであった。究極のところ，教員の多くはかかってくる負担を減らしてもらえれば，良い研究ができ，良い教育ができると考えているという，わかりやすい内容である。実際，大学教員は研究と教育を統一的に捉えているという資料もあった。

ところが，大学の機能分化，多様化が進む中，日本だけではなく，ヨーロッパでも研究と教育の関係は議論の的になっているという。教育だけをする大学なり教員が存在してもよいという考え方もあるのだ。イギリスの専門家には，研究と教育の間は“Zero relationship”であるとまで言っている人たちもいるそうだ。これは大多数の大学教員にとっては受け入れ難い考え方であろうかと想像するが，現実的には，自分の研究内容そのものを学生に伝授している教員は現在では多数派ではなく，研究と教育は「両立」すべきもので，分割不可能な一個のまとまりとは考えていない面もあると思う。「二足のわらじ」という表現を耳にすることも多い。研究では研究での業績をあげ，その一方で教育においてもやるべきことをやっていれば，それでいいという考え方だ。研究と教育のつながりは，教員個人の中にのみ内在するということになろう。この問題に関しては専門家の間でも結論が出ていないようであるが，非常に興味深いテーマであり，より多くの見解や理想形について，もっと知りたいと感じた。

講演の一部は，研究成果の搾取を中心とする大学教員の学問的誠実性に関するものであった。「モラル」も若者の指導に当たる人間にとっては必須要件なのである。学生側の権利が増強してきたため，昔風の弟子と指導者という関係，誰の研究かという境界線が曖昧な状態では，社会的基準とずれてしまう危険があるのだ。実際，近年，大学教員の資質に関係することとして，急激に難しくなっている点の一つは，学生との対人関係ではないかと感じている。この点も FD 活動の中で重視していただきたいと希望している。

講演の冒頭部分には，FD を教員個人の努力にまかせない取り組みが必要だというお話もあったが，最後の話題は FD に責任を負うのは個人なのか，学科や学部の長なのか，あるいは専門のセンターなのかという問題であった。やはり，専門の組織が必要なのであり，その責任は重いと感じた。そして，専門組織と各レベルの長が共通認識を持つことも大事ではないかと感じた。

羽田先生はユニバーサル化，産学連携，グローバリゼーションという3つの柱で，講演の背景となる現在の大学事情を説明してくださったが，専門的な学問を修めたい学生だけが大学に来るわけではなく，その一方で教養を身につけるという目的も重視されてはいないようだ。大学教員に求められる能力は拡大化，多様化，複雑化する一方である。FD がその変化についていくというよりも，変化を先取して教員を導いてくれることを期待したいと思う。

e-Learning講習会報告

高等教育開発センター　高橋　勇

第1回Moodle講習会

Moodleは，授業を支援するためのコンピュータシステムのひとつです。このシステムを使うと，簡単に授業用のWebページや電子掲示板を作成したり，電子メールで連絡事項を送付したり，電子的なレポートの回収やオンライン小テストなどを行うことができます。高等教育開発センターでは，学内でMoodleを利用できる環境の整備をすすめており，今回はその一環として，先生方を対象に使い方の講習会を開催しました。

今回の講習会では，内容を前半と後半の2つにわけ，それぞれ90分の講習を火曜と木曜の2回(前半を6/23と6/25，後半を6/30と7/2の各2回)実施しました。当日は，主会場である相模原キャンパスと，サブ会場である三陸，十和田，白金，新潟，の各キャンパスを遠隔会議システムでつなぎ，各サブ会場にはノートパソコンを持ち込んでもらって，操作実習も含めた講習を行いました。参加人数は延べ63名でした。

前半の講習では，Moodleのシステムの概要と操作方法の基本，授業内での導入の仕方や電子掲示板の設置方法，授業の参加者へメールで連絡する方法などについて講習しました。また，参加していただいた先生方には，実際に自分が担当する授業用のWebページ(コース)を作成してもらい，そのコースに様々な情報を掲載する作業や，電子掲示板を設置する作業などを体験してもらいました。

後半の講習では，授業で使った資料を学生へ配付する方法や，小テストを作成して実施する方法，レポート課題を出題して回収する方法などを講習しました。実際に簡単なファイルを作成してコースに掲載し，ダウンロードをしてもらったり，○× 形式の小テストを作成したり，課題の出題・回収・採点などをする作業を，実習を通じて習得してもらいました。これらの実習は，グループワークで先生役と学生役を入れ替えながら行ったので，実際の授業での具体的な利用イメージをつかんでもらえたのではないかなと思います。

また，参加していただいた先生方には，後日，授業で利用する際に役立ててもらえるように，今回の講習の内容をまとめた資料も提供しました。

今回の講習会では，情報基盤センターの協力により，その様子を録画して，現在，高等教育開発センターのWebページで公開しています(http://www.kitasato-u.ac.jp/cdhe/event/index.html)。どなたでも視聴することができますので，具体的な講習内容を知りたい方はアクセスしてみてください。

秋には少し高度な内容を含んだ第2回目のMoodle講習会を行いました。これについても，機会があれば内容を紹介する予定です。

クリッカー講習会

7月24日，クリッカー講習会が開催され，KEEPAD JAPANの松尾理恵氏から「クリッカーの概要と演示」，東京学芸大教育学部の新田英雄氏から「クリッカーを授業にどう活かすか ーピア・インストラクションを取り入れた授業実践ー」と題して講演していただきました。会場での参加者が44名，TV会議システムによる参加者が20名でした。当日のビデオとスライドは，高等教育開発センターのホームページでご覧になることができます。学内専用です。

クリッカーは，双方向型の授業を支援するシステムです。実際の装置としては，学生それぞれにカードサイズの小さな送信機(クリッカー)を配ります。送信機には0から9までの数字の書かれたボタンがあります。教員側にはコンピューターのUSBポートに接続した受信機を用意します。教員からの問いかけに対して学生が選択肢の中から一つのボタンを押して応えると，教員のコンピューターで即座に集計され，その場で結果がグラフとなって表示される仕組みです。

松尾氏のプレゼンテーションでは，聴衆が実際にクリッカーを操作し，松尾氏からの質問に答え，その便利さ簡単さを実感しました。授業前の準備として行うことは，質問スライドの作成とクラスの人数の入力だけです。授業後に，学生からの回答を記録しておくこともできます。もし，出欠確認などのため匿名ではなく実名でデータを取りたければ，授業前にクリッカーの1枚1枚と学生の対応付けをするための表を作成しておき，それに基づいて学生にクリッカーを渡す必要があります。

新田氏は，相互作用型授業のお話しと，その中でのクリッカーの利用についてお話ししてくださいました。彼は，ご自身の物理学の授業の改善方法を探る中で米国で進む基礎物理教育の改革に注目しました。アメリカでは1957年のスプートニクショックののち科学教育に大変な力を入れましたが，高校での物理の履修率は逆にどんどん下がっていってしまいました。しかし，1986年頃からは履修率が増加に転じています。それはちょうど，伝統的講義から相互作用型授業へ転換した時期と重なります。彼は，アメリカのメリーランド大学を視察した際のスライドを使って，そこで行われていたピア・インストラクション(以下PI)という手法を紹介してくださいました。それは，

(1) 学生に選択肢問題を出題する。
(2) クリッカー等を用いて学生に解答させる。
(3) 付近の学生同士で議論させる。答が異なる相手に対しては自分の答えの論拠を述べ，説得を試みさせる。
(4) 同じ問題に対してもう一度答えさせる。
(5) 正解を示し，解説する。

というものです。学生同士の議論の際には，教員は学生の意見に耳を傾けますが，教えることはしません。この際に，教員が予想もしなかった観点からの議論が聞けて授業改善に役立てられます。このような作業を授業の中でくりかえし，学生を巻き込んだ授業が展開されます。新田氏は，PIの特徴として，以下の5点を挙げました。

1. 大人数の学生に対して実施可能。(メリーランド大学では，エンジニアリング指向の学生，生物科学指向の学生向けのクラスそれぞれ200名程度のクラスで実施しているとのことです。)
2. 学生は能動的に考える習慣を獲得。
3. 学生の考え・理解度をその場で把握。
4. 学生の理解度に合わせた授業展開が可能。
5. 詳細な授業データの蓄積(クリッカー使用時)。

ご講演の中で，彼自身の授業がビデオで紹介されましたが，学生が多いに盛り上がっている様子がよくわかりました。

シリーズ　FDへの取り組み　第 8 回

一般教育部のFD活動

一般教育部FD委員長　岡野安洋

平成 19 年 4 月より一般教育部の FD 委員長に任ぜられて，それまでに蓄積された実績に新たな試みを加えながら，一般教育部の FD をより充実させるために，以下のことを中心として活動をしています。

① 教員研修会

平成 12 年度に一般教育部(当時は一般教育組織)の FD 委員会が組織されてから，1 年 1 回，専任教員全員参加による研修会が開かれています。初期の頃は「FD とは何か」という，もっぱら一般的な FD の意義と目的を理解するための講演でしたが，最近ではより問題を一般教育部に特化して，初年次教育，協同学習，高大連携をテーマとして取り上げています。その際，外部講師から最新の知識やスキルを得るだけでなく，ワークショップやグループ討議を取り入れて，より密度の濃い研修会となるように心がけています。また，教員研修会の記録は報告書としてまとめられ，講演やグループワークでの討議内容，参加者のアンケート結果などを載せています。

② 学生による授業評価

これは FD 委員会が，発足当初に取り組んだ課題といえます。まず教員に「学生による授業評価」に対する理解を諮った後，実施しました。現在では前・後期を通じて，専任教員はかならず 1 度は学生による授業評価を受けることになっています。そして，その結果はあくまでも各教員個人の授業改善に生かすことを目的とし，各自が学生の声を真摯に受け止めて授業改善に生かしていることと思います。なお，昨年前期までは一般教育部独自の「授業アンケート」を用いてきましたが，昨年度後期から高等教育開発センターが作成した「授業の振り返りシート」を使用しています。これは従来の一般教育部の評価項目に比べて，学生自身への問いかけも含まれ，授業改善のためにはより有効に働くものと思っています。

③ 教員相互の授業参観

昨年度後期より教員に授業の公開を呼びかけ，今年度前期には 11 名の教員が 29 の授業を公開し，22 名の参観者がありました。この活動の趣旨はあくまでも，教員の授業改善を目的とするもので，教員評価につながるものではありません。それ故全くの自由参加を前提としているため，公開者や参観者が偏る傾向が見られます。この点については趣旨の徹底と理解を深め，活動の活発化に心がけるべきであろうと思っています。

④「FD 通信」の発行

一般教育部の FD 委員会では年 2 回，「FD 通信」という簡単な冊子を発行しています。毎回 20 頁前後のパンフレットですが，情報発信の役割を果たしています。今年度前期で第 8 号となりましたが，前期は主として FD 関係の学会に参加した教員の報告，それに FD 委員を退任する方の感想を載せています。また後期には，「私の授業」と題して，各センター 1 名の教員にお願いして，ご自分の授業の現状報告をしてもらっています。なお，後期の号には学習支援室関連の記事として，チューターの先生方の指導内容や，本学学生に対する感想などをご執筆いただくと共に，学習支援室の利用状況の詳細も載せています。

以上，一般教育部における FD 活動の概要を書きましたが，まだまだ問題点を多く抱えていると感じています。まず，年 1 回の教員研修会で得た情報やスキルが，果たして実際にどれほど役立っているのかという検証が十分に行われていないように感じることです。様々な理由で，こうした研修会を頻繁に開催するのは困難ですが，それを補うために，「FD 通信」の活用なども今後の課題となるでしょう。次に「学生による授業評価」も，前述のように高等教育開発センター仕様の評価シートを利用することで内容的には大分改善されたように思いますが，データ結果の活用の仕方は十分とはいえない点もあり，さらなる有効利用の可能性を考えることも忘れてはいけないようです。こう書いてきますと問題山積ですが，いずれも組織内でのコンセンサスが前提となるので，地道な活動を積み重ねることが必要であると感じています。

FDのための必読書 —— 8

ウイリアム・ブロード，ニコラス・ウェイド著（牧野賢治訳）
『背信の科学者たち』

講談社ブルーバックス
1,140 円(税別)

今回は，いつもとは少々趣の異なる本の紹介である。センター講演会の中で講演者の羽田先生が大学教員による学問上の不正行為について言及されたが，本書は過去から現在に至る，自然科学の研究者による不正の数々について述べたものである。2世紀の天文学者プトレマイウスはヒッパルコスの観測データを自著の中に盗用し，ニュートンは自説を補強するために実験データをねつ造した。現在においても，ある研究者は巨額の研究費を得るためにデータを偽り，ある者は研究者としての地位を得るために発表済みの他人の論文を自分の論文として別の学術雑誌に投稿し，自らの業績にしてしまう。

最初は不正が暴かれていく過程が推理小説ばりに描かれているのを通俗的な興味で読み進んでいたが，途中から問題の深刻さに気付かされる。そもそも，論理性や他の研究者の追試による厳密な検証が保証されたはずの自然科学の研究においてなぜ不正行為が可能なのか。我々が盤石と思い込んでいる自然科学のこれらの特性に対して，著者は「追試の限界」「論理の神話」といった章で疑問を呈している。

自然科学系の教員にも，それ以外の教員にも，自然科学に対するイメージを見直すため，ご一読をお勧めしたい。

INFORMATION

平成21年度北里大学新任教員研修を終えて

平成21年度の新任教員研修が，去る9月2日(水)，3日(木)にクロス･ウェーブ東中野で行われました。今回の参加者は35名でした。

初日の午前は柴忠義学長の挨拶と講話，続いて小林裕志人事担当常任理事の講話がありました。午後からは，日本ODコンサルタンツのトレーナーである近藤裕子氏による「学生から信頼を得るためのコミュニケーション力」をテーマとした講習がありました。さらに，今回の参加者の一人でもある本学健康管理センターの柘植道子講師による講話「多様な大学生の悩み：理解と対応」，本学高等教育開発センターの鈴木牧彦センター長による報告「本学学生の学習に対する実態と意識」が続きました。どちらももっと時間をかけてじっくり聞きたくなる内容のものでした。夜は懇親会と自由懇談で互いの親交を深めました。

二日目は午前午後を通したプログラムで，まず午前中に名古屋大学高等教育研究センターの近田政博准教授による「学生を授業にどう巻き込むか」と題した講演と「ティップス先生からの7つの提案教員編」の紹介がありました。続いて参加者が6つのグループに分かれて，「ティップス先生…」を下敷きにした授業のアイデアを出し合う討議に入りました。グループ討議は午後も続けられ，最後に各グループによる発表･質疑応答･講評で全プログラムを終了しました。

平成21年度北里大学在職教員研修を終えて

平成21年度北里大学在職教員研修が，去る12月21日(月)に白金キャンパスで開催されました。この研修は，昨年度「北里大学教員FD研修会」として始まったものです。今回も，各学部・一般教育部・学府・2専修学校より1〜2名ずつ，合計21名の教員が参加しました。

研修は，小林裕志人事担当常任理事の講話で始まり，午前は本学獣医学部の杉浦俊弘教授による講話「学生の授業評価にどう応えるか？」，4つのグループに分かれての討議，と続きました。討議は，講話の内容を受けて「授業評価を自分の授業の中でどう活かすか」「授業評価を活かす仕組みをどう作っていくか」などをテーマとしました。最後に各グループによる発表がなされました。

午後は，立命館大学共通教育推進機構の木野茂教授による「双方向型授業への誘い」と題した講演がまず行われました。次に，参加者各自が双方向性を取り入れた授業案作成のワークを行い，続いてグループ内で互いの授業案を披露・検討し，最後に発表と講評が行われました。

研修に引き続いて情報交換会が行われ，和やかなうちに終了しました。

◆ センター員の活動

・第1回Moodle(授業支援システム)講習会開催
6月23日・25日・30日・7月2日，相模原：講師 高橋　勇 准教授

・第5回北里大学高等教育開発センター講演会「大学教員の能力開発ー教育と研究と学問的誠実性ー」開催
7月31日，相模原：鈴木，江川，小島，岡野，高橋，古矢

・平成21年度北里大学新任教員研修
9月2，3日，東京：鈴木，藤原，江川，小島，岡野，高橋，古矢

・講演・パネルディスカッション「学士課程における科学教育の未来」
9月25日，京都：藤原

・初年次教育プロジェクト会議
9月29日，10月14日，10月28日，11月11日，11月25日，12月9日，相模原：初年次教育プロジェクトメンバー

・一橋大学高等教育公開セミナー「アカデミック・スタンダードの国際的動向―大学教育における到達目標の設定と評価をめぐって―」
10月27日，東京：小島

・日本学生支援機構
「大学における学生支援取り組み状況調査研究プロジェクト会議」
10月28日，東京：小島

・国立教育政策研究所
「FDプログラムの構築支援とFDerの能力開発に関する研究会」
11月14日・15日，東京：小島

・第2回Moodle(授業支援システム)講習会開催
11月17日・18日・24日・25日，相模原：講師 高橋　勇 准教授

・日本学生支援機構「全国学生指導研修会」
11月19日，東京：小島

・朝日新聞教育プロジェクト　公開シンポジウム
「大学教育の分野別質保証に向けて　日本学術会議からの報告」
11月23日，東京：小島，古矢

・平成21年度北里大学在職教員研修
12月21日，白金：鈴木，江川，小島，古矢

・国立教育政策研究所
「FDプログラムの構築支援とFDerの能力開発に関する研究会」
12月26日・27日，東京：小島

編　集　後　記

今回，センター講演会概要を掲載しましたが，膨大なテープ起こしの原稿から削りに削ってこれだけの分量に納めましたので，割愛せざるを得ない内容が大変多くなってしまいました。より詳細な内容を，別の小冊子（叢書）にしてお届けする予定ですので，ぜひそちらにも目をお通し下さい。（江川）

北里大学高等教育開発センターニュース
Center for Development of Higher Education, Kitasato University NEWS
Vol.8
発行日　2010年1月31日
発　行　北里大学高等教育開発センター
〒228-8555神奈川県相模原市北里1-15-1
FAX：042-778-9543
発行責任者　鈴木　牧彦
表紙絵：古矢　鉄矢
北里大学高等教育開発センターWebサイト
http://www.kitasato-u.ac.jp/cdhe/